大腸がん（結腸がん・直腸がん）について

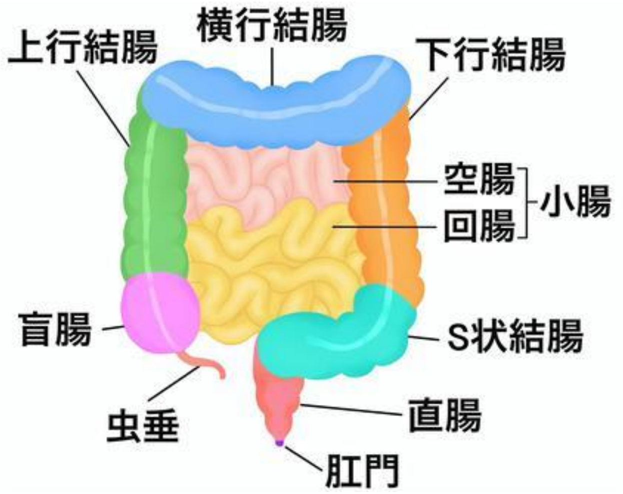
1. 大腸（結腸・直腸）の仕組みについて

大腸は、食べ物の最後の通り道です。小腸に続いて、右下腹部から始まりお腹の中をぐるりと大きく回って肛門につながります。

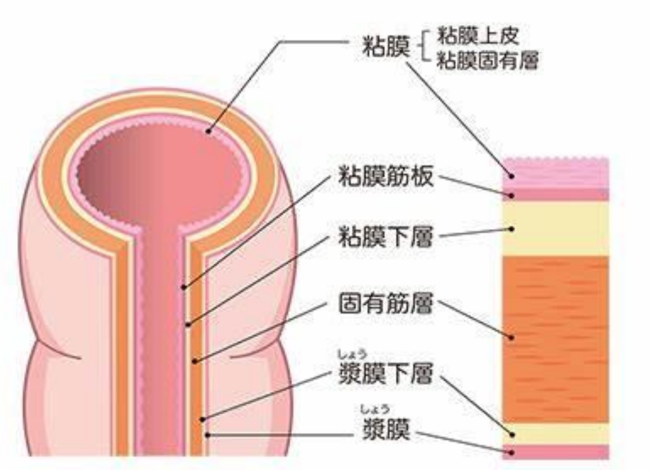
長さは 1.5～2m程の臓器で、結腸（盲腸、上行結腸、横行結腸、下行結腸、S状結腸）と直腸に分かれます。（◆図 1）

大腸の主な役割は、水分を吸収することです。大腸には栄養素の消化吸収作用はほとんどありません。小腸で消化吸収された食物の残りは大腸で水分を吸い取られ、肛門に至るまでにだんだんと固形の便になっていきます。大腸での水分の吸収が不十分だと、軟便になったり、下痢を起こしたりします。

◆図1　大腸の構造



◆図2　大腸の壁の構造



2. 大腸がん（結腸がん・直腸がん）とは

大腸がんは、大腸（結腸・直腸）に発生するがんで、腺腫という良性のポリープががん化して発生するものと、正常な粘膜から直接発生するものがあります。日本人ではS状結腸と直腸にがんができやすいといわれています。

大腸の粘膜に発生した大腸がんは次第に大腸の壁に侵入し、やがて大腸の壁の外まで広がり腹腔内に散らばる腹膜播種を起こします。また、大腸の壁の中を流れるリンパ液に乗ってリンパ転移をしたり、血液の流れに乗って肝臓、肺など別の臓器に遠隔転移したりします。大腸がん転移が、肺や肝臓の腫瘤として先に発見されることもあります。

（◆図 2）

3. 症状

早期の段階では自覚症状はほとんどなく、進行すると症状が出ることが多くなります。代表的な症状として、便に血が混じる（血便や下痢）、便の表面に血液が付着するなどがあります。がんが進行すると、慢性的に出血することによる貧血の症状（めまいなど）があらわれたり、腸が狭くなることによる便秘や下痢、便が細くなる、便が残る感じがする、お腹が張るなどの症状が起こったりすることがあります。さらに進行すると腸閉塞となり、便は出なくなり、腹痛や嘔吐などの症状が起こります。体重が減ることもあります。

最も頻度が高い、便に血が混ざる、血が付着するなどの症状は、痔などの良性の病気でも起こることがあるため放置してしまいがちですが、がんであった場合、そのままにしておくとがんが進行してしまいます。できるだけ早くがんを発見するため、このような症状がある場合は、早めに消化器科、胃腸科、肛門科などを受診するようにしましょう。

引用：大腸がん（結腸がん・直腸がん）がん情報サービス　（https://ganjoho.jp/public/cancer/colon/prevention screening.html）